「講　演　②」

グラバーと蝶々夫人伝説

熊本県立大学文学部教授　**村里　好俊**

従来、グラバー一家とオペラ『蝶々夫人』との間に具体的な関係があったということが、グラバーの生涯を語る上で欠かせない決まり文句であったし、ある意味で、国際親善の鍵を握るとさえ考えられてきた。しかし、本当に、そのような具体的関係があったのであろうか。

安政の五カ国条約で開港された港では、異国人と現地の女性との便宜上の結婚が、条約それ自体と同様に、経済的道理を備えていた。そして、一時的な妻たちは、たいてい見捨てられることになった。不平等な条約の下での自由貿易による不平等な経済発展は、女性たちがそのような状況に置かれることを当たり前のことにしたのであった。便宜的結婚は、通例それを生業（なりわい）とする仲介人の手で取り決められた。安政五カ国条約は結婚経済学に新たに仮借のない荒涼とした光景をもたらすことになったのである。過度に膨張した購買能力を備えた集団である欧米の植民者は、日本の現地で、思うままに連れ合いとか愛人を選ぶことが出来た。この経済的格差が『蝶々夫人』の物語には反映されて、悲劇を作り出すことになる。オペラ『蝶々夫人』を作曲したプッチーニは、このような実情を理解した上で、作品自体はたとえ郷愁的な内容であろうとも、その時代に起こっていた性的搾取に耳をそばだてて、そのオペラを創作したと考えられる。

パット・バーは『鹿鳴館』（Pat Barr, *The Deer Cry Pavillion*. Macmillan, 1969.）の中で、次のように書いている。

> 感傷性が醸し出され、浅ましい真実から遠く隔たっているにもかかわらず、蝶々夫人の物語は的を射ていた。最悪の道徳的罪を犯した張本人は、浮ついた生き方をする、愛想のいい、軽薄な、人の良い日本人女性ではなく、無慈悲な、洗練された、利己的な西洋の男性たちであった。日本人女性は甘やかされ、誉めそやされ、嘲られ、人形や、トンボや、いたずらな妖精のように、

思うままに捨て置かれる、かわいらしい玩具ではなかった――彼女たちは傷つき、冗談を飛ばし、愛を感じる人間であった。日本人の最悪の間違いは、西洋人の幻想に餌を与える手助けをする者たちが常に存在したことだ。蝶々夫人症候群がその頂点に達した時からおよそ40年後の1957年、日本人はかつての裕福な英国商人、T・B・グラバー氏の長崎の邸宅を博物館として公開した。観光客を引き寄せるために、この邸宅を「蝶々夫人の家」と呼んだのである。もし蝶々夫人が実在の人物だったら、腹を抱えて笑ったであろう。当のグラバー氏でさえ、面白がったであろう――一見したところ、愛想のよい、礼儀正しい紳士だが、50年以上この国に住み、最良の時にも最悪の時にも、日本に大きな共感を寄せ、日本を理解した兵(つわもの)なのだ。

パット・バーのこの簡潔な評言は、グラバーと『蝶々夫人』に具体的な繋がりがあったとする類いの主張が入り込む余地を許さない。

第二次世界大戦後、グラバー園とオペラ『蝶々夫人』との連想が生じたのは、グラバー園にいかにも西洋的雰囲気が漂い、(恐らく偶然の一致であろうが)、オペラの原作となった物語の出所と類似点があり、日本近代の歴史の形成期を要約していると思われたからであろう――パット・バーの言葉を借りると、蝶々夫人の物語が「観光客を引き寄せるために」利用されたのである。

ここで、蝶々夫人の候補として、二人の女性が浮かび上がって来る(家系図70頁を参照)。

① 一人目は、グラバーの妻ツル。とはいえ、彼女は、最初の夫、豊後竹田の岡藩の山村國太郎に棄てられたわけではなく、自らの意志で彼の元を去ったのである。そして彼女の夫は、二人から生まれた赤子のセンのことで無用の騒ぎ立てをしなかった。娘のセンは母親のツルになついて離れず、17歳になった1880～81年には一本松のグラバー邸に仮寓したこともある。ツルと蝶々夫人との一つの図像的な繋がりは、家紋としてツルの着物に縫い取られた蝶のような、実際には蛾のような、意匠である。しかし、ツルが「正真正銘の」蝶々夫人であるという考えは、ずっと昔に割り引かれた。その証拠には、登記簿に拠ると、ツルは、オペラ『蝶々夫人』の中で、蝶々夫人から強奪された息子のモデルと想定される新三郎(後に、富三郎と改名)の生みの母ではないからである。また、ツルの一生は、他の遊女たちに較べれば、さほどの悲劇に見舞われたわけではないようである。彼女の人生は

それほど長くはなかったが、グラバーの妻として、少なくとも物質的には安楽な生活に恵まれたと言っていいと思われる。

このようなツルと蝶々夫人との関連を否定する説に対する唯一の真摯な異議申し立ては、野田和子そして彼女を支持する楠戸義昭（『もうひとりの蝶々夫人――長崎グラバー邸の女主人ツル』、毎日新聞社、1997年）に代表される。野田和子はツルの子孫で、登記簿を解釈するのに長々と詳細な調査をして、この物語を蘇らせることに貢献した。この際の野田の解釈は、確かに、傾聴に値するものではある。

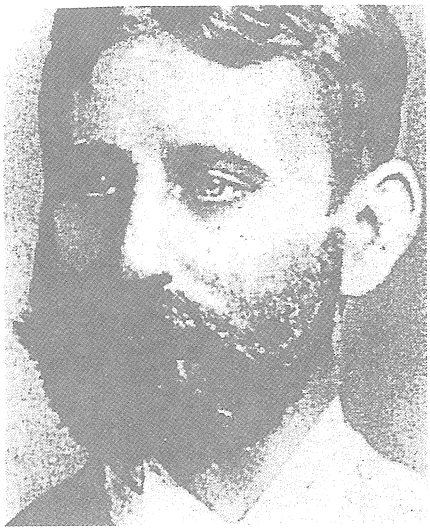
しかし、ツルに関して一言すると、プッチーニの「悲劇」に通じる妻の遺棄の場面は全く見当たらない。当時は、便宜上の結婚が普通の様式であったが、日本滞在の初期居留者たちのうち、全部が全部、ショーウインドーを破って貴重品を掻っ攫う類いの性的搾取を実行したわけではなかった。グラバーは確かに「誠実である」ことからは程遠かったし、一度は八ヶ月もの間アメリカへ行き、その姿を暗ましたこともあるが、実直にツルの面倒を見、彼女が亡くなるまで扶養したのである。彼女のことを公然と「私の妻」と述べてもいる。便宜上の結婚には、確かにある程度の搾取は付き物であったが、しかし、遺棄ばかりが一般に行われているわけではなかった。

② 二人目の蝶々夫人候補として、加賀マキが存在する。グラバーの息子である「新三郎（後に、富三郎）」の実母で、遊女であった加賀マキが発見されたとき、加賀マキは第二の被遺棄者（棄てられた者）になる可能性が生まれた。マキ自身が「金髪の悪魔」（頭の禿げかかった外国商人の代名詞）によって棄てられたかどうか定かではない。その「金髪の悪魔」は、この場合には、グラバーのことを指す。グラバーは、かつて自分とマキとの間に生まれた息子を、後になって、彼の妻ツルと一緒に奪い取りに戻って来るからである。ただし、この時に即座に思いつく問題点は、低い身分の性労働者であった加賀マキは、グラバーが一緒に住んでくれるなどと決して期待しなかったであろうということだ。現地の遊女であれば、予期せぬ妊娠は職業柄避けられない賭けだったのである。

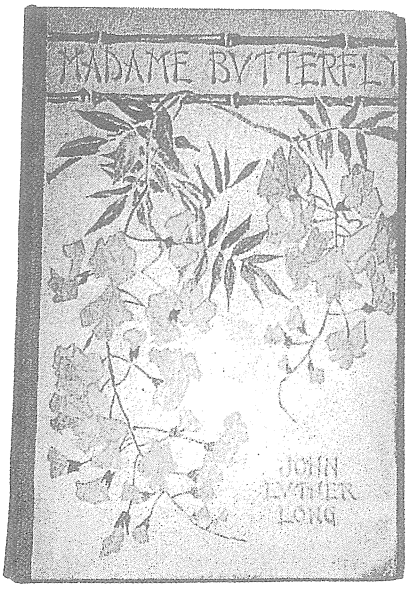
もう一つの問題点は、プッチーニのオペラに出るピンカートンと違って、グラバーが長崎の町を去ることで、別離という悲劇を際立たせることを決してしなかったということである。実際に、息子の新三郎が生まれたとき、グラバーは長崎に踏み止まって高島炭鉱の借金を清算する強い意志を言明していたのだ。

1980年代後半に、アレキサンダー・マッケイは、グラバーと蝶々夫人との関係

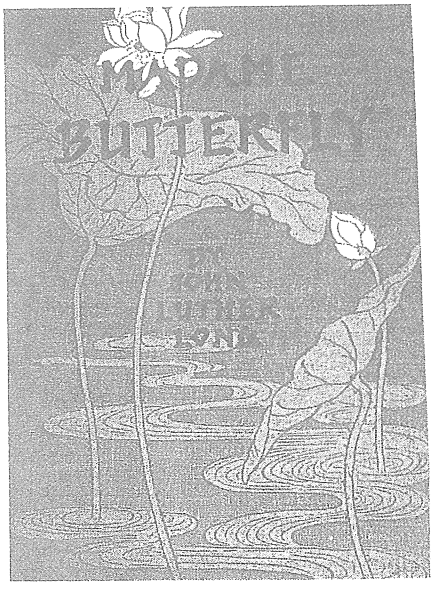
について唯一の妥当と思われる拠り所は、「加賀マキ」であるという事実を伝えて、衆目の関心を集めた。マッケイは、長崎に縁のある作家ジョン・ルーサー・ロング[1861-1927　ペンシルベニア州フィラデルフィア生まれの弁護士・小説家。短編小説「マダム・バタフライ」は一八九八年にユタ大学の学生雑誌『センチュリー・マガジン』一月号に掲載]（写真）がグラバーと加賀マキとの息子、富三郎をその小説の中で描かれた子供として見ていたかも知れないこと、そして加賀マキは、子宝に恵まれないグラバー夫妻によって息子を取り上げられた後、取り乱したかもしれないことを示唆している。この推論は、加賀マキを蝶々夫人と見る憶測の第二の側面を補強することになった。富三郎が1889～91年に、ロングと同じ時期にフィラデルフィアに滞在したと指摘して、この説を確証立てる者がいるし、また、後にロングが富三郎を名指ししていると示唆して支持する者もいる。

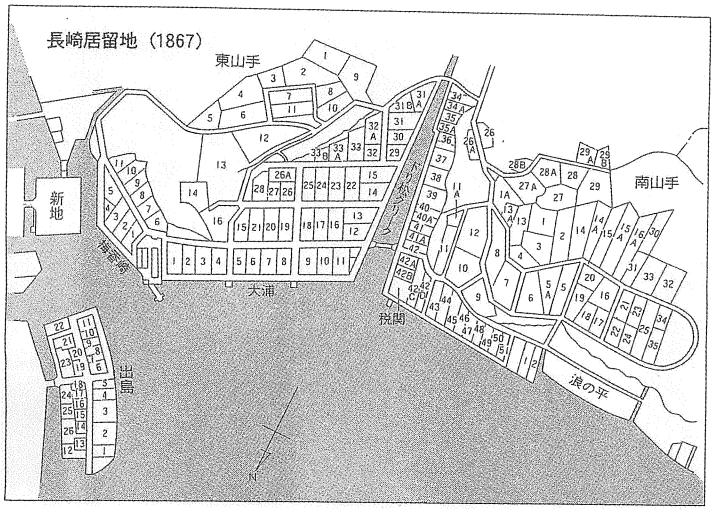

ジョン・ルーサー・ロング

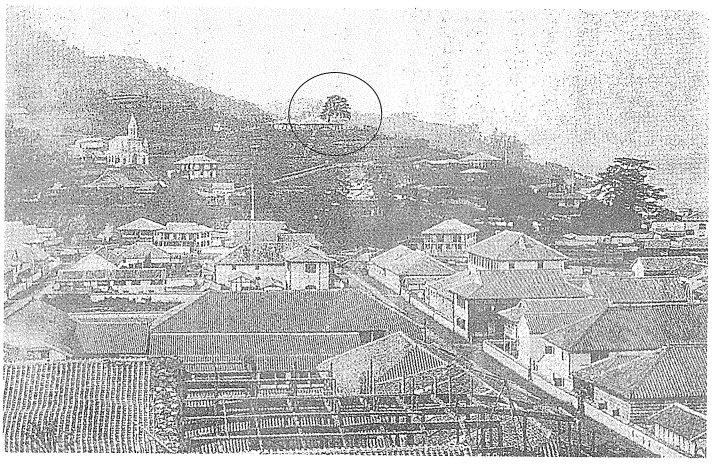
しかし、この話がプッチーニのオペラにまで辿り着く前に、ロングの小説にはいくつかの主要な変更が加えられねばならなかったであろう。その場合、グラバーはピンカートンのように海へと乗り出すことになっていたであろうし、ツルはアメリ



「マダム・バタフライ」の初版


「マダム・バタフライ」の二版





大浦居留地より南山手を望む。丘上に一本松邸。
その左手に大浦天主堂（ライデン大学蔵）。

カ人に変更されていたであろうし、マキは悲しくも失ってしまった夫から隠された存在だったであろう。しかし、マキは、普通に理解されるような仕方で、自分がグラバーと結婚していると思ってはいなかった。彼と不義を犯したが、彼を愛していると本心から思えるほど彼のことを知らなかった。彼女は遊女という職業上、どこかに繋がってはいなかった。パット・バーが指摘する通り、遊女は、西洋人男性の幻想の中でのみ、純朴な姿をしていた。マキは確かに新三郎を突然奪われてうろたえたかもしれない。とりわけ、グラバーが戻って来るとは全く予期していなかったであろう。グラバーが彼女の許に戻ったのは、ツルの不妊症が発覚したせいであった。しかし、当時は、赤子がより裕福な、あるいはより子育てに適した家族の養子となるのは、普通のことであった。グラバー自身も、後に息子、富三郎の嫁になる中野ワカに関して同じことをしたが、そこには何ら悲劇の影は存在しない。その上、マキはオペラの悲劇的ヒロインのように自殺せず、1905 年、還暦の年まで生きた。グラバーの妻、ツルより長生きしたのである。

恐らく、非常に重要な点は、加賀マキが長崎の南山手で便宜上の妻として暮らしたはずがないということである。この南山手の地区（長崎の地図参照）は外国人居留地内に位置した。当時は二つの階級の遊女が存在した。西洋人男性と日本人女性

との正規の「交渉・干渉」は、法的手続き上で禁止されていた。ただ登録税を支払う、いわば上級遊女は別であった。ツルと違って、マキは居留地に住むことを許される特許状を持たなかった。マキは許可証を持たない系列のありきたりの遊女で、居留地の外に貼り付いていたのである。一方、ツルは、許可証を与えられた、より格式高い遊女の系統で、居留地に入ることが出来、結果的に、グラバーの認知された妻になれたのである。

ツル・グラバー

グラバーは、オペラのピンカートンとは違って、長崎に留まり、企業家として会社経営に殉じることを、1870年代半ばから表明していた。ピンカートンは、アメリカ人の妻を選んで蝶々夫人を棄て、長崎の現地人になろうとする誘惑から目を覚ましたが、一方、グラバーは、初めはマキのどこか近くに留まり、別の遊女のツルとの関係を強固にしようとしたのである。仮にマキが蝶々夫人であるとしても、この永住の表明は、マキとの間に生まれた新三郎の養子縁組というトラウマ的場面の6年前に為された。そして、「金髪の悪魔の商人」でさえ断れない高待遇の申し出を三菱の岩崎弥太郎から受けて、グラバーが美味しい仕事に就いたのは、まさに息子の養子縁組の年であった。

では、蝶々夫人物語は、どのようにして生まれたのか、ここで整理してみよう。

物語がプッチーニのオペラへと結実したのは、二つの道筋を通ってである。一つ目は、1887年にフランスで出版されたピエール・ロチ[本名ジュリアン・マリ・ヴィオ 1850～1923]の小説『お菊さん *Madame Chrysanthememe*』)。ロチは、1885年の夏に船の修繕のため所属艦船が長崎に寄留した際に、長崎で一夏を過ごしたのである。

ロチの小説『お菊さん』の粗筋は、次のようである。

> 一人のアメリカ人が長崎に寄港し、仲介人を介して現地の女性と結婚の手筈を整える。花嫁として選ばれた女性は、その結婚を真剣に受け止めるが、アメリ

カ人水兵たちは一笑に付す。アメリカ人の夫が長崎から離れるとき、その女性は彼の子を宿し、彼の帰還を待ち続けて、他の結婚の申し出をことごとく断る。やがてその男が戻ってくるとき、金髪の女性と一緒だ。男の現地妻は、男が二人の結婚を真剣に受け止めていなかったことを実感して、自殺を図る。

このように、ロチの小説は、オペラ『蝶々夫人』と類似し、それを予表している。

ロチの小説は、アンドレ・メサジェ[1853～1929 仏の作曲家]の小歌劇に変貌する。1892年イタリアでその楽曲を制作した頃、メサジェは、ジャコモ・プッチーニと共にジュリ・リコルディ[1840～1912 イタリアの編集者・音楽家]の客であった。プッチーニは、早くも1872年には、カミーユ・サン＝サーンス[1835～1921]の『黄色の王女 *La Princesse Jaune*』で描写された田園詩風の日本に関心を示していた。『黄色の王女』は日本人女性とドイツ人医者とのありそうにない結婚を描いている。この医者はシーボルトに類似していて、ピンカートンとは相容れない高潔な行動をする。

二つ目は、サラ・ジェーン（ジェニー）・コレルが小耳に挟んだ長崎居留地での噂話経由である。ジェニーは、メソジスト教徒のアメリカ人宣教師で、短期間ながら、グラバーの息子、富三郎の母校である鎮西学院の校長を勤めた、アーヴィン・コレルの妻であった。コレル夫妻が5年間東山手六番地に滞在中に、手持ち無沙汰のジェニーは、ある「茶屋女」に関して耳にした断片的な話――恐らく居留者たちの完全な作り話――を一つの話に纏め上げて、作家志望で法律家の弟ロングに語り聞かせたことがある。1897年にフィラデルフィアに住む弟の元を訪れた時のことであった。この話をネタにして書かれたロングの小説は、ほとんどそっくりそのままオペラ『蝶々夫人』の台本に生かされることになる。ロングが文学雑誌『センチュリー・マガジン』に発表した「マダム・バタフライ」という短編が文学的野心によって動機付けられただけでなく、安政五カ国条約の撤廃に向けて日本の政治的活動への意識を高めたいと狙っていたことは、特記に値すると、ファン・レイという批評家は述べている。不平等条約が国家的存亡の危機となった日本の社会情勢では、ロングの描く蝶々夫人は、ピエール・ロチのそれと隣り合わせに置かれると、政治的色彩を帯び始めるように映る。便宜上の結婚は、不平等条約の国内版として暴露されたのである。ロングの小説は1898年の出版と同時に大好評を博すことになる。それは条約改正施行の一年前のことであった。

このロングの小説は、劇作家デヴィッド・ベラスコ[1853～1931]に取り上げられ、1900

年、ロングの小説に基づいて書かれたベラスコの芝居の上演をプッチーニは観劇することになる。こうして、プッチーニはロングとロチの小説の、両方の劇場版を観たことになるのだ。

こうして、プッチーニは作曲の準備がすっかり整っていた。その台本はルイジ・イッリカ[1857~1919]が担当した。その際に、イッリカは、日本愛好家のジュディス・ゴーティエ[1845～1917 フランスの詩人・歴史小説家。テオフィル・ゴーティエの娘]から、やや思慮の足りない手がかりを与えられる。ゴーティエの日本人女性観はやや偏狂で、日本人女性は「媚を売る」のが仕事だと書いている。また、イタリアのオペラ作曲家ピエトロ・マスカーニ[1863-1945]の『アイリス』には、やがて書かれるプッチーニのオペラへの紛れもないヒントがちりばめられている。蝶々夫人がピンカートンを一途に待っている場面や、彼女の儀式めいた自殺の悲劇的場面を暗示する情景が含まれているからである。

1901-4 年にかけて、プッチーニはオペラ『蝶々夫人』の作曲に従事する。イッリカの台本は、結局、ロングとベラスコを掛け合わせ、現地の情報提供者、とりわけ大山ひさ子という日本人女性に編集上の援助を得て出来上がる。大山ひさ子はローマ滞在の日本人公使の妻で、アメリカ人気質で書かれた箇所を修正するのに一役買うことになる。台本の体裁へと直す作業で、とりわけ気難しさで悪名高いプッチーニと共同制作しなければならないことで、イッリカの物語にはいくつかの修正が加えられ、物語の内容が原作よりもグラバー家の話に近くなったのは、皮肉なことかも知れない。例えば、原作では、蝶々夫人の子供は実母の許に残されるが、オペラの結末では、ピンカートンの正妻が子供を養子に欲しがる。ちょうどツルが新三郎を欲しがったようにである。この粗筋は、グラバー／マキ物語への類似点を示すが、やや隔たりが感じられる。これは、二つの解釈が偶然に連結した結果であると思われる。

1907 年、このオペラのアメリカ公演のために加筆修正が加えられる。それは案の定、アメリカ人たちがよりいっそう共感を寄せることができるように、彼らを描き出していた。この推敲されたオペラでは、横柄なアメリカ人の妻ケイト、すなわち、ピンカートン（つまり、似非グラバー）を盗み取った張本人は、ほとんど姿を現さない。そして観客は、地元民が単純で洗練されていないとする差別的な考え方によって生じる悲劇に、また引き戻されることになるのある。

ロングの小説が日本で著名になったのは、彼が直接、三浦環に彼の物語を語ったからであろう。三浦環は、現在もなお、蝶々夫人役の古参として日本中で有名であ

り、このオペラを里帰りさせた功労者でもある。三浦環の名前は、この役柄と切り離せないほどで、実際に、彼女の彫像が長崎のグラバー園の前面中央に見られる。三浦環はようやく 1936 年に東京では初めてこのオペラの主役を演じた。三浦環の努力や、物語を長崎の実在する場所、つまり、グラバー邸へ結びつけようとする試みとして、1967 年以来、「世界規模の『蝶々夫人』コンクール」が催され、その最終審査がグラバー園で実施されている事実などは、特筆に値するものである。

コレール夫人と「お蝶夫人」の原作者ロング氏

ジェニー・コレルは 1931 年 3 月に受けたインタヴューで、蝶々夫人物語の真相を知っているのは、自分を置いて他にないと豪語した（資料参照）。ただし、彼女のおぼろげな記憶、彼女のスキャンダラスな事件好み、詳細の欠落が、かえって彼女の説明にいっそうの疑義を抱かせるだけであろう。このことが機縁になって、戦後長崎市はあからさまな人物関係図を作り上げ、1957 年に観光名所としてグラバー園が整備されたとき、それは然るべき手順で推進されることになった。インタ

歌劇「お蝶夫人」の誕生を解決する發表

原作者ロング氏とお蝶夫人の素性

作家の令姉けふ東京の會で述べる

長崎で商人から聞いた哀れなお蝶さんの物語

發表を前にコレール夫人語る

初め

數回

ヴューの中で、コレルは富三郎が蝶々夫人と「英国人商人」の実子であると勘違いして述べている。この推理の糸は、野田和子の父、野田平之助によって辿られ、ツルを蝶々夫人と特定するグラバー／蝶々夫人関連の第一ラウンドの典拠となっていた。コレルがツルを蝶々夫人と確定したのは、トム［富三郎］の両親がこの物語にひょっとして関係があったのではないかという質問に答えて、トムがぼんやりとうなずいたことによる。しかし、その時、トムが何を考えていたのか、誰にわかるであろうか。彼は父親について度々質問されることにうんざりしていたのかも知れない。彼もまた、周到で如才ない男であった。そして恐らく、苛立ってもいた。アメリカの学校での様々に不愉快な経験が、不安な子供から不安な大人へと彼を変えていた。

結局、グラバー／蝶々夫人関連が見つけた目的地は、観光事業であった。敗戦のショックからまだ立ち直る途上にあった1957年の長崎市にとって、それは必須の産業であった。この物語は、この町から生まれ、相互の知人たちを巻き込んで進展していった。前に書いたとおり、都合のいいことに、ツルの家紋は、蝶・蛾が縫い取られていた。しかし、それ以上のことは全て、利潤追求的目的での潤色ではないかと疑われる。

1853年の浦賀沖で、アメリカ人のペリー総督は砲艦外交を実践した。この蝶々夫人物語は、その後に日本を訪れたアメリカ人女性の噂話から生まれ、彼女のアメリカ人の弟に取り上げられ、その主要な市場がアメリカで、あるオペラに変貌し、戦後アメリカ軍が長崎に駐留した間に、グラバーに繋げられたのである。本物の蝶々夫人とは誰かという疑問に対する答えは、本物の蝶々夫人などいなかった、あるいは、せいぜい、似たような境遇の複数の女性を張り合わせて作り上げたモデルというものであろう。所詮、蝶々夫人は架空の産物なのである。

幕末・維新の冷酷な経済的状況における性的振る舞いは、何かしら抒情的な味付けがなければ、直視するのが難しい。蝶々夫人物語は初期の貿易業者の行為をぎりぎりまで切り詰めたもので、絵のように美しいとはとても言えない代物である。当時の長崎の状況は、強者と敗者をはっきりと区別するがゆえに、その仲立ちとして「ロマンス」を必要としたのであろう。そして、外国人仲買人たちによって何度となく語りなおされた結果初めて、この物語は悲劇的に成り得たのではないではないだろうか。

参考文献

* Gardiner, Michael. *At the Edge of Empire: The Life of Thomas Blake Glover.* Edinburgh: Birlinn, 2007.
【ガーデナ、マイケル．村里好俊・杉浦裕子訳『グラバー伝――帝国の辺境にて』（仮題）、岩波書店、2012年6月出版予定】
* マッケイ、アレキサンダー．平岡　緑訳、『トーマス・グラバー伝』、中央公論社、1997年
* バークガフニ、ブライアン．平　幸雪訳、『グラバー家の人々　花と霜』、長崎文献社、2003年
* 杉山伸也、『明治維新とイギリス商人――トマス・グラバーの生涯』、岩波新書、岩波書店、1993年
* 楠戸義昭、『もうひとりの蝶々夫人――長崎グラバー邸の女主人ツル』、毎日新聞社、1997年
* 内藤初穂、『明治建国の洋商　トーマス・B・グラバー始末』、アテネ書房、2001年
* 白石一郎、『異人館』、朝日新聞社、1997年
* 山崎識子、『トーマス・ブレイク・グラバー　隠れ間のあるじ』、栄光出版社、1994年
* 山口由美、『長崎グラバー邸　父子二代』、集英社新書、集英社、2010年
* オールコック、ラザフォード．山口光朔訳、『大君の都――幕末日本滞在記』、岩波文庫、全三巻、岩波書店、1962年
* サトウ、アーネスト．坂田精一訳、『一外交官の見た明治維新』、岩波文庫、上・下巻、岩波書店、（1960年）2008年